





日本現代文學全集・講談社版

佐藤春夫集

日本現代文學全集

59

佐藤春夫集

編集

伊藤 整
龜井勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



昭和39年1月10日 印刷
昭和39年1月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1964

著者 佐藤春夫

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3~19
電話東京(942)1111(大代表)
振替東京3930

印刷 大日本印刷株式會社
眞印 株式會社 興陽社
製本 株式會社 大進堂
製函 株式會社 岡山紙器所
青革 株式會社 第一紙藝社
表紙 株式會社 石井
クロス 日本クロス工業株式會社
繪紙 日本加工製紙株式會社
用紙 本州製紙株式會社
貼紙 安倍川工業株式會社
見返し 三菱製紙株式會社
扉紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

佐藤春夫集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

殉情詩集……………五

西班牙犬の家……………三

田園の憂鬱……………六

お絹とその兄弟……………六

都會の憂鬱……………八

侘しすぎる……………九

窓展く……………一七

陳述……………一七

掬水譚……………一四

戰國佐久……………二五〇

晶子曼陀羅……………二六〇

「風流」論……………二五七

秋風一夕話……………二五七

芥川龍之介を哭す……………二五九

兼好と長明と……………二五九

森鷗外のロマンティズム……………二六〇

作品解説……………平野謙 二六三

佐藤春夫入門……………浅見淵 二六六

年譜……………豊 二七〇

参考文献……………四四五

佐藤春夫集

浄としして

草花みぢを
玉

水北石

其夫

殉情詩集

殉情詩集自序

われ幼少より詩歌を愛誦し、自ら始めてこれ
 が作を試みしは十六歳の時なりしと覺ゆ。いま
 早くも十五年の昔とはなりぬ。爾來、公にする
 を得たるわが試作おほよそ百章はありぬべし。
 その一半は抒情詩にして、一半は當時のわが一
 面を表はして社會問題に對する傾向詩なりき。
 今ごとく散佚す。自らの記憶にあるものす
 ら數へて僅に十指に足らず。然も、此の憾なし
 寧ろこれを喜ぶ。後、志を詩歌に斷てりとは
 非ざりしも、われは無才にして且つは精進の念
 にさへ乏しく、自ら省みて深くこれを愧づるの
 あまり遂には人に示さずなりぬ。但、殉情の人
 は歌ふことにこそ纔に慰めはあれ、譬へば、か
 の病劇しき者の呻くことによりて僅にその痛苦
 を洩すが如し。されば哀傷の到るものある毎に
 われは恆に私に歌うて身をなくさめぬ。又譬へ
 ば獵矢を負へる獸の森深く逃れ來りて、世を惡
 み人を厭ひて然も己が命を愛するの念はいや募
 り、己が口もて己が創痕を舐め癒さんと努むる
 が如し。

世には強記にして好事の士もあるものなり。

面榮ゆくもわがかの詩作を今更に語り出でて、
 時にはこれを編みて冊子とせよなど勸むる友さ
 へあり。されど誰かは、未熟にして早く地に墜
 ちたる果實を拾ひて客の爲めに饗宴の卓上に盛
 らんや。乃ち篤くこれを謝するのみなりき。こ
 の機にのぞみてわれは改めてかかる人人に乞は
 ん。わが舊き詩歌は悉くこれを忘れたまへ。少
 しく言葉を弄ばんか、今日のものとて同じく
 然したまへ。然らば今この集を取て世に問ふの
 故は如何。曰く米鹽に代へんとす。曰く春服を
 求めんとす。否、われは口籠ることなくして言
 ふべし。聽き給へ、われ今日人生の途なかばに
 して愛戀の小暗き森かげに到り、わが思ひは轉
 た落葉たり。わが胸は朝の下に碎かれたる薔薇
 の如く呻く。心中の事、眼中の涙、意中の人。
 兒女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた
 多少あり。げに事に依りてわが身には切なくも
 あるかな、わがこの歌。然れども既に世に問は
 ん心なれば、わが息吹なるわが調べはいつし
 かに世の好尚と相去れるをいかにせん。われは
 古風なる笛をとり出でていま路のべに來り哀歌
 す。節古びて心をさなくただに突止なるわが笛
 の音に慌しき行路のいかに泣くべしやは。た
 とひわが目には水流るるとも、知らず、幾人か
 ありて之に耳を假し、しばしそが歩みを停むる
 やいかに。
 嗟呼、わが嗚咽は洩れて人の爲めに聞かれぬ。
 われは情癡の徒と呼はるるとも今はた是非な
 し。

大正十年四月十三日

佐藤 春 夫

同心草

水邊月夜の歌

せつなき戀をするゆゑに
 月かげさむく身にぞ沈む。
 ものあはれを知るゆゑに
 水のひかりぞなげかるる。
 身をうたかたとおもふとも
 うたかたならじわが思ひ。
 げにいやしかるわれながら
 うれひは清し、君ゆゑに。

或るとき人に與へて

片こひの身にしあらねど
 わが得しはただこころ妻
 こころ妻こころにいだき
 いねがてのわが冬の夜ぞ。
 うつつよりはかなしうつつ
 ゆめよりもおそろしき夢。
 こころ妻ひとにだかせて

不結同心人
 空結同心草
 薔 滿

身も靈もをのきふるひ
冬の夜のわがひとり寢ぞ。

また或るとき人に與へて

しんじつふかき戀あらば
わかれのころな忘れそ、
おつるなみだはただ秘めよ、
ほのかなるこそ吐息なれ、
數ならぬ身といふなかれ、
ひるはひるゆゑわするとも
ねざめの夜半におもへかし。

海邊の戀

こぼれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき。
こぼれ松葉に火をはなち
わらべのごときわねなりき。

わらべをとめよりそひぬ
ただたまゆらの火をかこみ
うれしくふたり手をとりぬ
かひなきことをただ夢み、
入り日のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか、
海べのこひのはかなきは
こぼれ松葉の火なりけむ。

斷章

さまよひくれば秋ぐさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし、花ちりぬ。

琴うた

吹く風に消息をだにつけばやと思へ
どもよしなき野べに落ちもこそすれ

梁塵秘抄

かくまでふかき戀慕とは
わが身ながらに知らざりき、
目をふるままにいやまさる
みれんを何にかよはせむ。

空ふくかぜにつてばやと
ふみ書きみれどかひなしや、
むかしのうたをさながらに
よしなき野べにおつるとぞ。

後の日に

つれなかりせばなかくに
そらにわすれて過ぎなまし、
そもいくそたびしぼりけむ
たもとせつなしかのたもと。

せつなさわれにつもるとも
沾ちてはかわくものなれば
昨日のたもとにこと問はむ
ぬるるやいかにほけふも。

よきひとよ

よきひとよ、はかなからずや
うつくしきなれが乳ぶさも
いとあまきそのくちびるも
手をとりに泣けるちかひも
わがけふのかかるなげきも
うつり香の明日はきえつつ
めぐりあふ後さへ知らず
よきひとよ、地上のものは
切なくもはかなからずや。

こころ通はざる日に

こころを人にさらせども
げにもとなげく人ぞなき、
こころのいたで血を噴けど
あなやと叫ぶ人ぞなき。
すまじきものは戀にして
苦しきものぞこころなる、
こころはいとし、すべもなし、
手にはとられず目には見られず。

なみだ

埋火もきゆや泪の蒸る音 芭蕉

あるはのきばゆたつけぶり、
あるは種をゆくたにのみづ、
あるはわが目にわくなみだ。
これをさだめとさとするゆゑ、
せひなきものと知るらめど、
とめてとまらぬものなれば、
せつなやあはれほそぼそと、
ひとすぢにこそながるらし。

感傷肖像

摘めといふから
ばらをつんでわたしたら、
無心でそれをめちやめちやに
もぎくだいてゐる。
それで、おこつたら
おどろいた目を見ひらいて、
そのこなごな花びらを
そつと私の手にのせた。
その目は涙ぐんで笑ひ
その口は笑つて頬は泣いてゐる。
表情の戸まよひした
このモナリザはまるで小娘だ。

感傷風景

あなたとわたしとは向ひあつて腰をかけ、
あなたはまぶしげに西の方の山をのぞみ、
わたしはうつりと東の方の海をうかがひ、
然しふたりはにこにこして同じ思ひを樂し
む。

とありし日のとある家の明いバルコン。
何も知らない家の主人にはよき風景をほめ、
ふたりはちらちらとお互の目のなかを樂し
む。
戀人の目よそれはまあ何といふ美しい宇宙
だらう。

全くあなたのその目ほどの眺めも花もどこ
にあらう……
おお、思ひ出すまい。ふたりは庭のコスモ
スより弱く、
幸福は卓上につと消えた鳥かけよりも淡く
儂く、
歎きは永く心に建てられた。あの新築の山
莊のやうに。

柔かきかかる日の光のなかに
いまひとたび、あはれ、いまひとたび
ほのかにも洩したまひね、
われを戀ふと。

北原白秋「斷章」二十五

晝の月

舊作のうち記憶に残れるもの三
四。別に「晝の月」及び讀み人
知らぬ古曲の一節を拾ひてここ
に採録す。舊作は概ね數年前わ
が二十三歳ごろの作なり。

ためいき

一

紀の國の五月なかばは
椎の木かしわのくらき下かげ
うす濁るながれのほとり
野うばらの花のひとむれ
人知れず白くさくなり、
佇たつみてのおもふ目に
小さななみだもろげの
素直なる花をし見れば
戀人のためいきを聞くこちするかな。

二

柳の芽はやはらかく吐息して
丈高くわかき梧桐ふじはうれひたり
杉は暗くして消しがたき憂愁を秘め
椿の葉日の光にはげしくすすり泣く……

三

ふといづこよりともなく君が聲す。
百合の花の匂ひのごとく君が聲す。

四

なげきつつ黄昏の山をのぼりき。
なげきつつ山に立ちにき。
なげきつつ山をくだりき。

五

蜜柑はちまんとばたけに來て見れば
か弱かじやくき枝の夏蜜柑

たのしげに

大なる實をささへたり。

われもささへん

たへがたき重き愁うれしを

わが戀の實を。

六

ふるさとの柑子かんしの山をあゆめども
癒えぬなげきは誰がたまひけむ。

七

遠く離れてまた得難き人を思ふ日にありて
われは心からなるまことの愛を學び得たり
そは求むるところなき愛なり
そは信ふかき少女の願ふことなき日も
聖母マリアの像の前に指を組む心なり。

八

死なんといふにあらねども
涙ながれてやみがたく
ひとり出て佇みぬ
海の明けがた海の暮れがた
——ただ青くとほきあたりは
たとふればふるき思ひ出
波よする近きなぎさは
けふの日のわれのころぞ。

少年の日

1

野ゆき山ゆき海邊ゆき
眞ひるの丘かみねべ花を藉しき
つばら瞳の君ゆゑに
うれひは青し空よりも。

2

影おほき林をたどり
夢ふかきみ瞳を戀ひ
なやましき眞晝の丘かみねべ
花を藉しき、あはれ若き日。

3

君が瞳はつばらにて
君が心は知りがたし。

君をはなれて唯ひとり
月夜の海に石を投ぐ。

4

君は夜な夜な毛糸けいと編かむ
銀の編み棒に編む糸は
かぐろなる糸あかき糸
そのラムプ敷き誰がものぞ。

二つの小唄

男のうたへる

ひとりものかや二十日月はつかづき、海の夜あけにの
こりたる。

女のうたへる

かがみくもらすわがといき、夕べは月の暈かざ
となる。

むかし、いかなる人のいか
なるをりにやのこしたりけ
む、かかる戀慕の祕曲ひと
ふしあり。

しんじつこひしきものならば、つまも子も
あるものか、ともおぼすらめども、おもへ
ども、わりなさをえにしたたれず、切なし
やゆるさせたまへ、なわすれそ、互たがひに、け

ふを。と、なげばぜひもなしや、しんじつ
こひしきものゆゑに血をながしてもともお
もへども、おもへども。あきらめてきても
得わずれで、おもかげ。ゆめに見てゆめさ
めて、あなわが身、わが世、憂き世。

晝の月

野路の果、遠樹の上、
空澄みて晝の月かかる。

あざやかに且つは仄か
消ぬがに、しかも嚴か。

見かへればわが心の青空、
おお、初恋の記憶かかる。

心の廢墟

.....
さるを今君ここにおはさず、
われは今空しくも
遠き君がころに語を寄するのみ、
われにはや歌つくる力はあらず、
われわが爲めに口ずさめども
君の聞き給はぬ歌を如何でわれつ
くるを得んや！
.....

ルネ・チオルジャン「水邊聖歌」
堀口大學譯

心の廢墟

その戀人の中にはこれを慰むるも
のひとりだに無くその罪はこれに
背きて仇となれり 耶利米亞哀歌

「主よ、わが心の爲めに
さまよへるシオンの娘を
遣しめよ。」

「さまよへるシオンの娘よ、
わが心に来れ、
來りわが心の礎に坐して哭け。」

「來り見よ、シオンの娘、
わが心は荒果てて
汝がふるさとの都のごとし。」

「來り哭け、シオンの娘、
わが心の廢墟はいま
かがやけるみ空の月かげに濕ふ。」

かく歌へるわが歌により
シオンの娘ひとり來り
しばしわが心に坐して哭きぬ。

坐して哭けるシオンの娘は
されど、現世のものには非ず、
これはこれ影の影にして。

影は影なる聲によりて哭く、
わが心の廢墟より
いや深き寂寞を揺起して哭く。

斷片

われら土より出でたれば土にかへる
われら裸にて生れたれば裸にて生く。
げにもよ——
われらひとりにて産れたればひとりにて生
く。
ひとりにて生きて、さてひとりにて死にゆ
く.....

わが溜息

夜もすがら日もすがらわが長息け
どもそも誰がためと問ふ人もなし
わが靈は陰府にくだる細き徑にして
わが溜息は陰府より洩るる風なれば
とほくかすかに通ひ來りてわが唇の上に消
ゆ。
われはわれひとりしてわが溜息をもらし
その一息ごとに陰府の近さを測り知る。
人あり、これを感じてこれを聞くとも

わが溜息をおもひやらすわが爲めに泣かず
ただ身ぶるひしてひたすらにこれを悪み怖
る。

げにそは屍のほひを帯びて暗く冷く
光達しがたき底よりもる風なれば。

メフィストフェレス登場

海につづける城の櫓。

夜。

波の音きこゆ。

思ひ沈める騎士ひとり。

この時、メフィストフェレス登場。

「今晚は！

大そう陰氣なお顔をして

お淋しさうだ。

ちよつとお話相手をさせてください。

さて、一本氣な殿様！

物語風の騎士！

君は近ごろ立派なお城を建てましたね、

噂を聞いて參上して見たが、

見事！ 見事！

それに思ひ出といふ貴女の

青ざめた亡霊によく奉仕して御座る。

感心！ 感心！

ところで殿様。

お城は飛んだところへ建てましたなあ。

足場は大丈夫ですかい。

「たい私はその道のくろうとだが――

ちよつと御覽。

さて智惠のない地盤さね、

まるでこれや女ごころの沙濱だ。

そうれ！ 風が吹けば沙丘

波が荒れれば洲……」

メフィスト雙手をひろげて風と波との身ぶり

よろしく潤歩す。

「……どうです。

僕がかうちよつと歩いただけでも、

何と！ 少々は揺れませう。

これや一そう中空へ建てた方がましだつ

た。

なるほどお城は立派さね、

今さら立退くのは惜しいやうだ。

だが悪い事は言はない、

もういいかげんに立退いては！

それとも殿様！

お城の崩れる目を待つて

幽霊と心中なさるお心掛けですかい。

それもよからう、御隨意だ。

私は他人の意志は尊重しますからな。

おや、おや！

これやお氣に觸つたかな。

それではせいぜいおひとりでお泣きなさい。

たまにはしんみりひとりを知るのも身の

爲めです。

さやうなら。

陰氣なところに長居は無用だ。

どうれ、ちよつと寄り道をして

あのしや、れた一組を見て来ようか、

奴等は全くしや、れて居るよ――

泣きながら唇を吸ひ合つて靈とやらの傷

を甜あつてゐるのだから……」

突然、騎士は立上り、長劍を抜きてメフィ

ストを刺さんとす。

この時槽はおもむろに少しづつ傾く事。

騎士は聲を上げて呻く。

見えざるところよりメフィストの哄笑聞

ゆ。

騎士はよろめき倒れんとして僅に劍により

て身を支ふ。

夜深くして歌へる

わが歎きの歌

燈暗無人説斷腸 陸放翁

……わが歎きは終にわがものなれば

人、これをかへり見ず。

又かへり見ることを我は許さず、

ヨブの友よ來りてヨブを慰めざれ。

わが歎きよ、おおわがものよ、

われは限りなくなんぢを愛す、

彼等が妻になすがごとく

また彼の女らが幼子になすがごとく。

わが歎きよ、ただ一つなるわがものよ、

われは、妻なく幼子なきわれは

夜もすがら強くなんちをかき抱きて
 なんちがうへにわが涙を盡す。

おおわが歎きよ、わがひとり子よ

なんちが母はわが戀にして

なんちが母はなんちを遣して早く去りぬ。

なんちよ、なんちは面かけ母に似てかなし、

わが歎きよ。なんち生ひ育て。

永く生きよ。息絶ゆること勿れ。

われをして永く具になんちを愛し

なんちに依りてなんちの母が面かけを忍ば

しめよ。

われは今、母なきなんちをかき強く抱く。

夜ふかし、見ずやわが子、

なんちが母の亡霊は今宵もまた來りて

われとなんちとの傍にやさしくも添寝した

り……

聖地パレスチナ

聖地パレスチナは何時まで聖地なり。

たとひ異端の寺立ち並び、異端の都となり

異端の弓檣の上に異端の星集ひ耀き

パレスチナの水は異端の噴井よりふき溢れ

異端の徒は異端の怪しき花を蒔き

パレスチナの土は異端の種を培ひて

荆ある異端の花を花ざかりにすると、

歎く勿れ、そのかみの聖地、今日の聖地、

後の日の聖地、

一たびまことの聖地なりしパレスチナ

吾がパレスチナぞ何時までも吾が聖地なる。

殉情詩集 畢

西班牙犬の家

夢見心地になることの
好きな人の爲めの短篇

ある。さうして又急に駆け出す。こんな風にして私は二時間近くも歩いた。

歩いてゐるうちに我々はひどく高くへ登つたものと見える。そこはちよつとした見晴しで、打開けた一面の畑の下に、遠くこの町とも知れない町が、雲と霞との間からぼんやりと見える。しばらくそれを見て居たが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとすれば、一たい何處なの地理は一向に知らないのだから、解らないのも無理ではないが、それはそれとして、さて後の方はと注意して見ると、そこは極くならかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなつて居るらしく、どこも一面の雑木林のやうである。その雑木林は可なり深いやうだ。さうしてさほど大きくもない澤山の木の幹の半面を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、櫟や樫や栗や白樺などの芽生したばかりの爽やかな葉の透間から、煙のやうに、また匂のやうに流れ込んで、その幹や地面やの日かげと日向との加減が、ちよつと口では言へない種類の美しさである。私はこの雑木林の奥へ這入つて行きたい氣持になつた。その林のなかは、かき分けねばならぬといふほどの深い草原でもなく、行かうと思へば譯もないからだ。

私の友人のフラテも同じ考へであつたと見える。彼はうれしげにずんずん林の中へ這入つてゆく。私もその後に従うた。約一町ばかり進んだかと思ふころ、犬は今までの歩き方とは違ふやうな足どりになつた。氣らくな今までの漫步の態度ではなく、織るやうないそがしさに足を動かす。鼻を前の方に突き出して居る。これは何かを發見したに違ひない。兎の足あとであつたのか、それとも草のなかに鳥の巢でもあるのであらうか。あちらこちらと氣ぜはしげに行き來するうちに、犬はその行くべき道を發見したものとらしく、眞直に進み初めた。私は少しばかり好奇心をもつてその後を追うて行つた。我々は時々、交尾して居たらしい梢の野鳥を駭かした。斯うし

フラテ（犬の名）は急に駆け出して、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところ、私を待つてゐる。この犬は非常に賢い犬で、私の年來の友達であるが、私の妻などは勿論大多數の人間などよりよほど賢い、と私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時々、思ひもかけぬやうなところへ自分をつれてゆく。で近頃では私は散歩といへば、自分でどこかへ行かうなどと考へずに、この犬の行く方へだまつて行つて行くことに決めて居るやうなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私は未だ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこを歩かう。そこで私はそこを曲る。その細い道はだらだら坂道で、時々ひどく曲りかねつて居る。私はその道に沿うて犬について——景色を見るでもなく、考へるでもなく、ただぼんやりと空想に耽つて歩く。時々空を仰いで雲を見る。ひよいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘んで、自分の鼻の先で匂うて見る。何といふ花だか知らないがいい匂である。指で摘んでくるまはし乍ら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちよつと立ちどまつて、首をかしげて、私の目の中をのぞき込む。それを欲しいといふ顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちよつと嗅いで見て、何だ、ビスケットぢやなかつたのかと言ひたげで

た早足で行くこと三十分ばかりで、犬は急に立ちどまつた。同時に私は潺湲たる水の音を聞きつけたやうな気がした。(一たいこの邊は泉の多い地方である) 犬は耳を觸性らしく動かして二三間ひきかへして、再び地面を嗅ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思つたよりもこの林の深いのに少しおどろいた。この地方にこんな廣い雑木林があらうとは考へなかつたが、この工合ではこの林は二三百町歩もあるかも知れない。犬の様子といひ、いつまでも續く林といひ、私は好奇心で一杯になつて来た。かうしてまた二三十分ほど行くうちに、犬は再び立ちどまつた。さて、わつ、わつ! といふ風に短く二聲吠えた。その時までは、つい気がつかずに居たが、直ぐ目の前に一軒の家があるのである。それにしても多少の不思議である、こんなところに唯一つ人の住家があらうとは。それが炭焼き小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭といふ風なものはない様子で、また唐突にその林のなかに雜つてゐるのである。この「林のなかに雜つて居る」といふ言葉はこゝでは一番よくはまる。今も言つた通り私はすぐ目の前でこの家を發見したのだからして、その遠望の姿を知るわけにはいかぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と位置とから考へて見てさほど遠くから認め得られようとも思へない。近づいての家は別段に變つた家とも思へない。ただその家は草屋根であつたけれども、普通の百姓家とはちよつと趣が違ふ。といふのは、この家の窓はすべてガラス戸で西洋風な造へ方なのである。ここから入口の見えないところを見ると、我々は今多分この家の背後と側面とに對して立つて居るものと思ふ。その角のところから二方面の壁の半分づつほどを覆うたつたが、言はばこの家のここからの姿に多少の風情と興味とを具へしめて居る裝飾で、他は一見極く質朴な、こんな林のなかにありさうな家なのである。私は初めこれはこの林の番小屋でないかしらと思つた。それにしては少し大きすぎる。又わざわざこんな家を建てて番をしなければならぬほ

どの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定を否定した。兎も角も私はこの家へ這入つて見よう。道に迷うたものだと言つて、茶の一杯ももらつて持つて来た辨當に、我々の空腹を満さう。と思つて、この家の正面だと思へる方へ歩み出した。すると今まで目の方の注意によつて忘れられて居たらしい耳の感覚が働いて、私は流れが近くにあることを知つた。さきに潺湲たる水聲を耳にしたと思つたのはこの近所であつたのであらう。

正面へ廻つて見ると、そこも一面の林に面して居た。ただこゝへ來て一つの奇異な事にはその家の入口は、家全體のつり合ひから考へてひどく贅澤にも立派な石の階段が丁度四級もついで居るのであつた。その石は家の他の部分よりも、何故か古くなつて所々苔が生えて居るのである。さうしてこの正面である南側の窓の下には家の壁に沿うて一列に、時を分たず咲くであらうと思へる紅い小さな薔薇の花が、わがもの顔に亂れ咲いて居た。そればかりではない、その薔薇の叢の下から帯のやうな幅で、きらきらと日にかがやきながら、水が流れ出て居るのである。それが一見どうしてもその家のなから流れ出て居るとしか思へない。私の家來のフラテはこの水をさも甘さうにしたたかに飲んで居た。私は一瞥のうちにこれらのものを自分の瞳へ刻みつけた。

さて私は靜に石段の上を登る。ひつそりとしたこの四邊の世界に對して、私の靴音は靜寂を破るといふほどでもなく響いた。私は「おれは今、隱者か、でなければ魔法使の家を訪問して居るのだぞ」と自分自身に戯れて見た。さうして私の犬の方を見ると、彼は別段變つた風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふつて居た。

私はこつこつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。内からは何の返答もない。私はもう一べん同じことを繰返さねばならなかつた。内からはやつぱり返答がない。今度は聲を出して案内を乞うて見た。依然、何の反響もない。留守なのかしら空家なのかしらと考へてゐるうちに私は多少不氣味になつて來た。そつと足音をぬすん

で——これは何の爲めであつたかわからないが——薔薇のある方の窓のところへ立つて、そこから脊のびをして内を見まはして見た。窓にはこの家の外見とは似合しくない立派な品の、黒ずんだ海老茶にところどころ青い線の見えるどつしりとした窓かけがあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋のなかはよく見えた。珍らしい事には、この部屋の中央には、石で彫つて出来た大きな水盤があつてその高さは床の上から二尺とはないが、その眞中のところからは、水が湧立つて居て、水盤のふちからは不斷に水がこぼれて居る。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床——これもやつぱり石であつた——は少ししめつぽく見える。このこぼれた水が薔薇のなかからきらきら光りながら蛇のやうにぬけ出して来る水なのだらうといふことは、後で考へて見て解つた。私はこの水盤には少なからず驚いた。ちよいと異風な家だとはさきほどから氣がついて居たものの、こんな得體の知れない仕掛まであらうとは豫想出来ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家の内部を窓越しに觀察し初めた。床も石である。何といふ石だか知らないが、青白いやうな石で水に濕つた部分は美しい青色であつた。それが無造作に、切出した時の自然のままの面を利用して列べてある。入口から一番奥の方の壁にこれも石で出来たファイヤブレイスがあり、その右手には棚が三段ほどあつて、何だか皿見たやうなものゝ積み重ねたり列んだりして居る。それとは反對の側に——今、私がのぞいて居る南側の窓の三つあるうちの一番奥の隅の窓の下に大きな素木のままの裸の卓があつて、その上には……何があるのだから顔をびつたりくつつけても硝子が邪魔では無い。それどころから見られぬ。おや待てよ。これは勿論空家ではない。それどころか、つい今このさきまで人が居たに相違ない。といふのはその大きな卓の片隅から、吸ひさしの煙草から出る煙の絲が非常に靜かに二尺ほど眞直に立ちのぼつて、そこで一つゆれて、それからだんだん上へゆくほど亂れて行くのが見えるではないか。

私はこの煙を見て今思ひがけぬことばかりなので、つい忘れて居た煙草のことを思出した。そこで自分も一本を出して火をつけた。それからどうかしてこの家のなかへ這入つて見たいといふ好奇心がどうもおきへ切れなくなつた。さてつくづく考へるうちに、私は決心をした。この家の中へ這入つて行かう。留守中でもいい這入つてやう。若し主人が歸つて来たならば私は正直にわけを話すのだ。こんな變つた生活をして居る人なのだからさう話せば何ともいふまい。反つて歓迎してくれないとも限らぬ。それには今まで荷厄介にして居たこの繪具箱が、私の泥棒でないといふ證人として役立つであらう。私は蟲のいいことを考へて斯う決心した。そこでもう一度入口の階段を上つて、念の爲め聲をかけてそつと扉をあけた。扉には別に錠もおりては居なかつたから。

私は這入つて行くといきなり二足三足あとすざりした。何故かといふに、入口に近い窓の日向に眞黒な西班牙犬が居るではないか。顎を床にくつつけて丸くなつて居眠りして居た奴が、私の這入るのを見て狡さうにそつと目を開けて、のつそり起き上つたからである。

これを見た私の犬のフラテは、うなりながらその犬の方へ進んで行つた。そこで兩方しばらくうなりつづけたが、この西班牙犬は案外柔和な奴と見えて、兩方で鼻面を嗅ぎ合つてから、向うから尾を振り初めた。そこで私の犬も尾を振り初めた。さて西班牙犬は再びもとの床の上へ身を横へた。私の犬もすぐその傍へ同じやうに横になつた。見知らぬ同性同士の犬と犬とのかういふ和解はなかなか得難いものである。これは私の犬が温良なのにも因るが主として這入つて居た。この西班牙犬はこの種の犬としては可なり大きな體で、例のこの種特有の房々した毛のある大きな尾をくるりと尻の上へ巻上げたところはなかなか立派である。しかし毛の艶や、顔の表情から推して見て、大分老犬であることは、犬のことを少しばかり